

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第25回 ボビー・ジェントリー 「ビリー・ジョーの歌」

貧しい一家の哀感をサザン・ゴシック的に描く



Bobbie Gentry
"Ode To Billie Joe"
Capitol ● T2830 (mono) /
ST2830 (stereo) [1967]
⇒Raven [Australia] ©RVC/D287

1967年、小学6年生の夏、俺の家族は日本からテキサスのダラスに引っ越すことになった。これは子供だった俺にとって最高の場所だった。家の裏に流れる川で泳いだり、釣りをしたり、滝を滑ったり、毎日のように友達と川で遊んでいた。なかには本物のライフルを持っていく友人もいた。またテキサスの学校に通う子供たちは完全にふた通りに別れ、一方は裕福な家庭、も

う一方は本当に経済力のない家庭で育っていた。片や芝生の庭がある家で、学校までは舗装道路が通っている。片や狭い庭で馬や鶏を飼い、学校までの道のりは泥道だ。俺の親は国の仕事をしていながら、幸いにも裕福なエリアだった。そして俺はそんな対極にある世界を目の当たりにして、驚いていた。新しい経験だった。英語ではこういったお金がない人たちのことをダート・

のB面だったが、ラジオのDJは「ビリー・ジョーの歌」を選んでくれた。
曲はサザン・ゴシックという小説のスタイルを取り、アメリカ南部が舞台となっている。サザン・ゴシック・スタイルの小説は、神秘的でアイロニック、異常な出来事が起こるなか、ストーリーが進んでいき、主に南部の生活や人種差別、経済格差の問題を取り上げている。ウィリアム・フォークナー、テネシー・ウィリアムズの小説をはじめ、あのネル・ハーパー・リーの『アラバマ物語』もこのジャンルだ。ボビーはそんなサザン・ゴシック・スタイルで、あの若い男の自殺話を表現した。

Was the third of June
Another sleepy dusty delta day
I was out choppin' cotton
And my brother was baling hay
And at dinnertime we stopped
And walked back to the house to eat

あれは6月の3日のこと。いつもの眠くて埃っぽいデルタの一日だった。1行目から、けだるい様子が想像できる。デル

タがあるミシシッピ州の6月は、もう夏真っ盛りだ。熱くて、湿度も高い。歌い手本人で、主人公の女の子でもあるボビーは、コットンの木の手入れしている。ボビーの兄は干し草を「bale」していた、つまり干し草をペイリング・ワイヤーで四角形にまとめた。夕食の時間になったので、彼らは仕事を止め、家まで戻っていく。彼女はもう仕事ができる年齢で、その上に綿花の畑で働くということはお金に苦労している家族だと推測できる。

And mama hollered at the back door
"You all remember to wipe your feet!"
And then she said
"I got some news this morning from
Choctaw Ridge
Today Billie Joe MacAllister's
Jumped off the Tallahatchie Bridge"

ここからボビーは台詞を入れてくる。母親が裏口から「holler」した、つまり叫んだ。「ちゃんと足を拭くのを忘れないでね」。そして事件を告げる。「チョクター・リッジからの知らせなんだけど、今日、ビリー

プアという。ダートは土、プアは貧乏なこと。ひどい言い方はホワイト・トラッシュ。彼らは白人だから、白いごみ」というわけだ。ちなみに、エドガー・ウィンターはこういった環境で育ったから、バンド名をホワイト・トラッシュにした。

今回紹介するボビー・ジェントリーも子供のときはお金がなく、家には水道も電気もなかったらしい。祖母がボビーのために乳牛1頭とピアノを交換してあげたという逸話がある。今でも彼女が生まれたミシシッピのチカサー郡の平均年収は約1万3000ドルぐらいで、人々の20%は国が定める貧困のレベル以下で暮らしている。

話は戻るが、俺がテキサスへ引っ越したその夏にアメリカで大ヒットしていた曲がこのボビー・ジェントリーの「ビリー・ジョーの歌 (Ode To Billie Joe)」だった。この年の『ビルボード』ホット100のナンバー・ワンで、どのラジオ局でもこの曲が流れていた。そしてグラミー8部門にミネートされ、4部門で受賞した。当時は珍しく、ボビーは自分で曲を書き、自分でプロデュースしていた。この曲はもともと「ミシシッピ・デルタ」というシングル

・ジョー・マカリスターが、タラハチ橋から飛び降りてしまったよ」と。チョクター・リッジという街もタラハチ橋も、ミシシッピ州に実在する。聞いたことがある人も多いだろうが、ボブ・ディランの「The Death Of Emmett Till」という曲は、黒人の少年エミットが殺され、タラハチ川に捨てられたという実話を歌っている。

And Papa said to Mama
As he passed around the black eyed
peas
"Well Billie Joe never had a lick of sense
Pass the biscuits please
There's five more acres
In the lower forty I got to plow"

ここから父親の登場だ。黒豆を渡しながら父親が母親に話しかける。あのビリー・ジョーにはセンスのかけらもなかったよな。つまり、馬鹿なやつだったと言っている。そのビスケットを取ってくれ。まだ下の畑に耕さなきゃいけないらエーカーの土地があるんだ。ここでのビスケットはお菓子ではなく、アメリカの田舎でよく

食べる小麦粉ベースのベストリーのことだ。

And manna said it was a shame about
Billie Joe anyhow
Seems like nothing ever comes to no
good up on Choctaw Ridge
And now Billie Joe MacAllister's
Jumped off the Tallahatchie Bridge

「ここでもう一度母親が言う。『ベリーの
ことは残念だったわね』。チョコクター・リ
ッジという村では何も良いことにはならな
い。そんな悲観から、ベリー・ジョー・マ
カリスターはタラハチ橋から飛び降りてし
まったというんだ。

And brother said he recollected
When he and Tom and Billie Joe
Put a frog down my back
At the Carroll County picture show
And wasn't I talking' to him
After church last Sunday night?
"I'll have another piece of Apple Pie
You know it don't seem right
I saw him at the sawmill yesterday



on Choctaw ridge

And now you tell me

Billie Joe's jumped

Off the Tallahatchie Bridge"

そして今度はポビーの兄が話す。彼とト
ム、ベリー・ジョーが、キャロル・カウ
ンティのピクチャー・ショウ(昔の言葉で
映画館)で、ポビーの背中にカエルを入
れたことを思い出したと。ベリー・ジョーは
きつと兄の友達だ。ポビーの兄が彼女に聞
く、このあいだの日曜夜の教会の後でピ
リーと話してなかったかい?。そして何
もなかったように、アップルパイをちょ
っと取ってくれないか?と言う。その次の
"it don't seem right"は、何か変だな、と
いう意味。俺は昨日、チョコクター・リッ
ジの製材所で彼に会ったばかりだ。それな
のに、ベリー・ジョーがタラハチ橋から飛び
降りたって?。彼は不思議に思っている。

Manna said to me

"Child, what's happened to your

appetite?

I've been cooking all morning

And you haven't touched a single bite?"

母親が娘に言った。『あなた、食欲はど
うしたの?。ひと口も食ってらなうじやな
い。私は朝から料理してたらどうなの?。』
'single bite'は、ひと口、という意味だ。

"That nice young preacher
Brother Taylor dropped by today
Said he'd be pleased to have dinner
on Sunday
Oh by the way
He said he saw a girl
That looked a lot like you up on
Choctaw Ridge
And she and Billie Joe
Was throwing something
Off the Tallahatchie Bridge"

ここでもまた会話に戻る。あの素敵な若
い牧師のブラザー・テイラーが今日家に立
ち寄ってくれたの。日曜日の晩に夕食を食
べに来てくれるって。そういえば彼がチョコ
クター・リッジであなたに似ている女の子
を見かけた。そしてその娘とベリー・ジ

ョーが、タラハチ橋から何かを投げ捨てて
いたと言っていたわ。

A year has come and gone
Since we heard the news about Billie Joe
And brother married Becky Thompson
They bought a store in Tupelo
There was a virus going around
Papa caught it and he died last spring
And now manna doesn't seem
To want to do much of anything
And me I spend a lot of time
Picking flowers up on Choctaw Ridge
And drop them into the muddy water
Off the Tallahatchie Bridge

「ここでポビーの言葉にまた戻る。『ピ
リー・ジョーのことを聞いてから、もう1年
が過ぎた。兄はベッキー・トンプソンと結
婚して、ツペローという街
で店を買った。その頃、病
気が流行って、父親はそれ
にかかってこの春に死んで
しまい、そのせいか母親は
無気力になってしまった。』

私はほとんどの時間をチョコクター・リッ
ジで花を摘んで過ごしている。

この話は解決しない。ポビーとベリーが
橋から何を捨てたのか、聞く人の想像を様
々にかきたてる。よく言われるのは、墮ろ
してしまつた子供だろうという説。その罪
悪感でベリー・ジョーは自殺してしまった。
ポビーの食欲がなかったのは彼と関係があ
つたからなのかもしれない。ポビー本人は
この件に対して、答えを出していない。彼
女がそれよりもっと大切にしたのは、身近
な誰かが亡くなつても、人々の日常は普通
に続くという光景。友人が死んでしまつて
も、兄は結婚して新しい人生を始める。ポ
ビーと母は共に大事な人を亡くし、同じ悲
しみを抱えて生きていく。人生の営みが続
いていくことを淡々と曲にしているんだ。
それはメロディーにもよく現われている。
独特の世界感に引き込まれる一曲だ。



ジョージ・カックル /
GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロッ
ク・パーク<開拓地>で、
音楽の世界にのめり込
む。ハワイアンなどの
CDをプロデュースする傍
ら、インターFMでは音楽
番組「レイジーサンデー」
のパーソナリティをつと
め、音楽通ぶりを披露。
さらにサーフ・イベントな
どのMCでも活躍。
[http://whatsupmusic
inc.com](http://whatsupmusic.inc.com)